

## 自己愛人格障害と自己対象転移についての Kohut の概念の検討：Z氏の症例を通して

上 地 雄 一 郎

### 1. は じ め に

Kohut が、自己愛人格障害の精神分析治療の過程で出現する自己対象転移を概念化したことは、人格発達や心理療法についての精神分析的視点全体を変革することにつながった。Kohut と彼の自己心理学についての紹介文献はいくつか存在するが、まだ Kohut の概念が多くの人に経験的・実感的に理解されているとは言いがたい。なかには Kohut の概念は難解だという感想をもらす人もいる。しかし、Kohut の概念は、そのほとんどが内省と共感によって観察可能な事実を「経験に近い」形で概念化したものである。筆者は、Kohut の理論・概念をさらに「経験に近い」説明の仕方で紹介したいと考え、すでにいくつかのレビューを行った（上地、1993a, 1993b; 上地、1994a, 1994b, 印刷中）。本稿は、上地（1993a）の不備を修正し、自己愛人格障害における2つの分裂現象や自己対象転移の性格と推移に重点をあてて、Kohut の理論を紹介するものである。具体的には、上地（1993a, b）と同様に「Z氏の症例」（Kohut, 1979a）を紹介し、その流れに沿って検討していくことにしたい。なお、以下で特に引用を示さない部分は、Kohut（1971, 1977, 1984）を要約したものである。

### 2. 自己愛人格障害について

Kohut の言う自己愛人格障害とは、顕在的な症状や訴えだけに基づいて診断されるものではない。それは患者の「自己」がもつ中心的な病理に基づいて診断されるものであり、決定的な診断基準は、精神分析が進むにつれて「自発的に展開してくる転移の性質」（1971, p. 23）である。その転移が自己対象転移と呼ばれるものである。Kohut によれば、自己愛人格障害を有する患者は、表には、恐怖症、強迫、ヒステリーといった神経症的症状を表しているかもしれないが、その一方で、抑うつ気分、仕事への熱意や自発性の欠如、人間関係での鈍感さ、心身の状態に対するこだわり、倒錯傾向といった自己愛的障害をうかがわせる問題が存在する。そして、詳しく話を聞いていくと、漠然とした自己愛的傷つきやすさ、自尊心 self-esteem の欠如、自尊心を調節することの困難さ、理想システムにおける障害などが発見されるかもしれない（p. 22）。自尊心の調整の困難さは、少しのことで自尊心が傷つき激しい自尊心低下が生じ

るとか、自己顕示欲求に伴って強い恥の感情、自意識過剰、誇大感、興奮などが生じることとして現れる。また、理想システムの障害というのは、内的な基準や理想に従って自分を方向づけることができず、外的他者の承認がないと安心できないような傾向である。この他、Kohut は、自己愛人格の病理が明確に表現される事例の特徴として次のような症候を挙げている(1971, p. 23)。

- ①性的領域：倒錯的ファンタジー、または性への関心の欠如。
- ②社会的領域：仕事面での抑制、重要な関係を形成し維持する能力のなさ、逸脱的行為。
- ③人格の顕在的特徴：ユーモアの欠如、他の人の欲求や気持ちへの共感の欠如、バランス感覚の欠如、コントロールできない怒りが出現する傾向、病的虚言癖。
- ④心身症的領域：心身の健康への心気症的こだわり、様々な器官における自律神経性障害。

### 3. 自己の構造と統合性

上記のような自己愛人格障害の問題を構造的に理解するためには、「自己」の次元に注目しなければならない。

従来の精神分析では、自己とは自己表象（自己イメージ）をはじめとする様々な意味を表す言葉である。しかし、Kohut のいう自己とは、従来の定義の範囲を超えており、私たちに生じる「私」という経験の諸相を包含するものである。Kohut によれば、自己 self は、「空間的にまとまりをなし、時間的に永続する単位 unit であり、主導性 initiative の中心かつ感覚印象 impression の受容者 recipient である」(Kohut, 1977, p. 99)。つまり、空間的まとまりと時間的連続性をもって体験され、感覚や知覚を受け取る主体、行動を発動する主体として経験される「私」のことである。また、自己は構造としてとらえることができ、個人ごとに組織化(統合)の程度が異なる。「成人の自己は、融和 cohesion から断片化 fragmentation に至る様々の程度の融和性 coherence、活発 vigor から衰弱 enfeeblement にいたる様々の程度の活動性 vitality、秩序 order から混沌 chaos に至る様々の程度の機能的調和 functional harmony の状態で存在している」(Kohut & Wolf, 1978: The Search for the Self, Vol. 3, p. 362)。例えば、私たちが自分自身に一貫性、主体性、時間的展望、活気、内面の調和を体験しているなら、私たちの自己はよく組織化・統合されているといえる。逆に、自分がちぐはぐ・ばらばらな感じがし、時間的展望がはっきりせず、抑うつ的でエネルギーが枯渇しているように感じるなら、自己の統合のレベルが永続的または一時的に低下しているのである。同一人において、時間的推移に伴って統合の程度が変動することもある。

統合性のある自己を総称的に「融和した自己 cohesive self」と呼び、統合性が崩れた状態を(広義の)断片化 fragmentation と呼ぶ。Wolf (1988) の次のような説明が分かりやすいであろう。「私はひとりの人であり、考え、感じ、経験する。私は、エネルギー、幸福感、楽観主義

に満ちている時もあるが、抑うつ的で、エネルギーがなく、集中して考えることができない時もある。痛みや苦痛を感じる時には、動きもぎこちなくなり、健康について気に病み、自分や世の中について全般的に良いようには考えない。未来は寒々とした感じがし、言いようのない不安に襲われるかもしれない。……幸福感に満ちた状態という自己経験は、自己の融和性から生まれるものである。……自己は一つの構造 structure である。すなわち、自己は時間が経過しても存続し、比較的ゆっくりと変化する。自己は、過去、現在、未来という歴史を持つ。自己が、構造、構成要素、まとまりを持つというのは、比喩である。気がかりなことがあり、エネルギーがなくなり、気分が憂鬱で、注意が集中できず、考えがまとまらないといった自己経験は、自分がばらばらになったような感じとして表現できるかもしれない。Kohut の用語では、この状態を断片化という。すなわち、自己経験の諸々の側面が協応あるいは互いに調和していないように思われる状態である」(pp. 11-13:要約)。

さらに、自己はいくつかの構成要素をもつと考えることができる。Kohutが重視したのは、次の3つである (Kohut & Wolf, 1978, p. 362; Kohut, 1979b, p. 451)。

- ①力や成功を勝ち取ろうとする努力、すなわち野心の追求が生まれてくる極 (層)
- ②理想化された基本的目標 (理想) をはらんでいる極 (層)
- ③野心と理想を媒介する、または野心と理想の間の緊張関係によって活性化される才能と技能

Kohut は、私たちが自己の統合性を維持し、活力と自尊心に満ちて、創造的な人生を歩むためには、野心と理想が重要であると考えた。野心とは、私たちが何かを達成・表現して自己のすばらしさを認めてもらおうと願う心の動きである。理想とは、私たちがそこに到達したい、それと同じになりたいと願う理想化された基準・価値である。私たちは、ある領域において明確な野心や理想をもつと、「野心に駆られ、理想に導かれて」(Kohut, 1977, p. 180) 何かを成し遂げようと試みる。そしてこの動きは、目標を達成するために必要な才能・技能を育てる。Kohut は、野心と理想の緊張関係が生来的な才能・技能を活性化するという。このな野心—才能—理想の連続体のうち最も原型的・基本的なものは、幼少期に親の影響で出来上がるが、Kohut はこれを中核自己 nuclear self と呼ぶ。明確な中核自己を有し、これを実現する人生を歩むとき、私たちは本当の充足感を味わうことができる。Kohut の理論の最も重要な貢献の一つは、こうした野心や理想が幼少期の親との関係を通して形成される過程とその病理を明らかにしたことである〔自己の構造や中核自己の形成をめぐる諸問題については、上地 (1994a) を参照〕。

これまで述べてきた自己という次元から自己愛人格障害の患者の問題を表現するなら、彼(彼女)らの自己は、ある程度の統合性を有しているのだが、統合性が崩れやすく、空虚感、抑うつ、自尊心低下などに陥りやすい。統合性が崩れる契機となるのは、自尊心を傷つけられる出来事、他人の承認・賞賛・導きが得られなかったこと、ちょっとした目標の喪失、些細な失敗などである。また、彼(彼女)らの中核自己は、幼少期の親子関係の問題が原因で未組織なままにとどまっており、自己の中心に創造的な人生を可能にする野心—才能—理想という連続体

が形成されていない。平易に言えば、彼（彼女）らは本当の自分が見えない状況におかれているのである。これらの点は、次の節で事例を解説していくうちに明らかになってくるであろう。

#### 4. 自己対象転移と自己対象

自己愛人格障害の人は、精神分析的治療のなかで特有の転移を形成する。それが自己対象転移 selfobject transference である。自己対象転移には、理想化転移 idealizing transference、鏡転移 mirror transference、双子（もう一人の自己）転移 twinship (alter-ego) transference の3種類が区別されている。ここでは鏡転移と理想化転移を紹介する。自己対象については、上地（1993a, 1994b）を参照してほしい。最初に予告したように、これからは「Z氏の症例」を呈示しながら議論を進める。このZ氏は、Kohut が最初古典的精神分析のオリエンテーションで分析を行い、一旦終結した後、今度は自己心理学的オリエンテーションで再分析を行った事例である。以下に示す分析経過は、Kohut（1979a）を筆者が要約したものである。

##### (1) 症例提示：Z氏の症例（その1）

###### ① Z 氏の 概 要

Z氏は、分析開始当時20代半ばの男性で、大学院生であった。父親は実業家であり資産家でもあったが、4年前に死んでいた。Z氏は、母親と一緒に暮らしていた。彼の主訴は漠然としていたが、不整脈、手に汗が出る、喉に何かつまる感じがする、便秘や下痢といった心身症的症状、女性と関係が持てないための孤立感、大学で能力を発揮できていないということが中心であった。しかし、彼が分析治療を求める動機になった出来事は、高校時代からつきあっていた男性の友人が彼から距離をおき始めたことであった。Z氏の母親は侵入的で支配的な人であったが、Z氏はこの友人とのつきあいのおかげで精神的平衡を保つことができていたのである。Z氏の問題の細部は、Z氏の抵抗を克服することによって少しずつ明らかになっていった。彼は頻繁に自慰を行っており、自慰に伴う空想は、「強くて要求がましく飽くことをしらない支配的な女性から性行為を強いられる」というマゾヒスティックなものであった。家族写真や家族映画から、1歳半までのZ氏は幸福な子どもだったことが推測できた。しかし、Z氏が3歳半の時に父親が病気で入院し、父親はその時に知り合った看護婦と一緒に暮らすようになった。父親は1年半後、Z氏が5歳のときに、看護婦と別れて家に帰ってきた。しかし、Z氏の親の夫婦関係は、父親の死の2、3カ月前まで改善せず、緊張に満ちたものであった。

###### ② 第1分析（古典的オリエンテーション）の第1期

分析の1年目のZ氏は、Kohut に理解されたいという欲求が強かった。週末の分析の中断、分析の時間変更、Kohut の休暇などに反応して、怒りや抑うつが生じ、心氣的とられや自殺念慮も出現した。Kohutは、Z氏のこうした自己愛的欲求、自分は特別だという尊大な気持ちを、

「母親との前エディプスの関係への退行」であり、母親を独占できた1歳半までの自己愛的段階への固着とみなした。Kohut は、Z 氏が「母親は自分だけのものであり自分を去勢する父親は家にはいない」という幻想を維持しているのだと解釈した。Z 氏は、こうした Kohut の解釈に対して怒りを交えて抗議した。

### ③ 第1分析の第2期

分析開始後1年半たった頃から、Z 氏の怒りと要求は減っていった。Kohut は自分の解釈が効果をあげたのだと確信した。ところが、Z 氏の方は、怒らなくなった理由を Kohut が言ったことに対する反応だと主張した。Kohut は、あるとき、解釈の前に「もちろん、自分が当然与えられるべきだと思うものを与えてもらえないと、傷ついてしまいますが」という言葉をはさんだ。この言葉が Z 氏を変えたというのである。Kohut は、Z 氏が面子を保ちたいためにこんなことを言っており、未解決のエディプスの問題を否認していると思ったが、この場はそのままやりすごした。分析がスムーズに進み始め、Z 氏が前エディプスの母親への自己愛的備給を放棄しつつあると感じたので、その流れを妨げたくないと思ったからである。

Kohut の解釈は、Z 氏に2つの記憶を呼び覚ました。ひとつは原光景に関するものであり、もうひとつはマゾヒスティックな空想を伴う自慰であった。彼は、5歳から8歳まで両親と一緒に寝ていたので、両親の性交を目撃していた。また、父親が帰ってきた5歳の頃から、自慰を行い始めた。自慰の時には、女性によって奴隷のように扱われ、女性の排泄物を始末するなどといったマゾヒスティックな空想をした。Kohut は、古典的精神分析の理論にしたがって、この空想は「母親を所有したい願望に対する無意識の罪悪感」の表現であるとみなした。空想に現れる女性は男根を持った支配的な女性であり、これは Z 氏が「母親は強いペニスをもっているのだから、父親よりも強く、父親は去勢者としては恐れるに足らない」ということにより去勢不安を否認しているのだと考えた。

また、Z 氏は11歳のときにサマーキャンプで知り合った男性カウンセラー（高校教師）との関係について語った。Z 氏は、この教師の野外活動家としての能力、哲学・文学・音楽についての教養などを尊敬していた。彼との関係は、2年にわたって続き、ついに互いの性器を愛撫し合うといった同性愛的関係にまで発展したが、Z 氏に思春期の身体的変化が現れると解消された。Kohut は、これが情緒的に母親から離れていく時期と重なるので、カウンセラーとの関係は理想化された母親との前エディプスの関係の再現だとみなした。

分析の後半になると、Z 氏のマゾヒスティックな空想は減少し、ついには消滅した。彼は、母親の家を出て、一人で暮らし始めた。ついには、女性とデートをするようになり、性的関係も経験した。

このような流れを、Kohut は次のように考えた。Z 氏の誇大性と自己愛的欲求は、前エディプスの母親への固着であり、エディプス的な競争心と去勢不安への防衛である。これを徹底操作した結果、前エディプスの母親への愛着が軽減し、それにつれて抑圧されていたエディプス

葛藤が復活してきたのであると。Z氏が終結6月前に見た次のような夢も、分析の前進を示すものと思われた。

「Z氏は家の中にいて、ドアには亀裂がある。外に父親がいて、贈り物の包みを抱えて、入れてもらうのを待っている。Z氏は非常にびっくりしてドアを閉め、父親を入れないようにした」。

夢についてのZ氏の連想から、これは父親が家に帰ってきたときのことに関連していると思われた。Kohut は、この夢を父親へのアンビヴァレンスを示すものと考えた。

#### ④ 第1分析の終結期

Z氏の分析は、フロイト的概念に従えば、すべてが収まるべきところに収まっていた。しかし、この時期には終結期に見られるはずの特徴が欠けていた。話し合われた内容の派手さ比べて、情緒的には浅い感じがし、感情をかきたてられることがなかったのである。ただ、Kohut と別れることについてのZ氏の感情には本当の深みが感じられた。

#### ⑤ 第2分析の前のコンサルテーション（2回）

分析終了の4年半後にZ氏から手紙が届き、そこには分析に戻りたいという気持ちがほのめかされていた。Kohut は、2回のコンサルテーションを行った。Z氏は、依然独身であり、性的関係は情緒的に深みがなく、真の満足を欠いていた。仕事の面でも表向きはうまくやっていたが、仕事を負担で退屈なものを経験していた。Z氏に分析を再開することを促した重要な出来事があった。それは、最近母親が深刻な人格変化を示していたことである。母親は、Z氏がひとりで暮らし始めた5年前から、家にこもることが多くなり、範囲は限られていたがパラノイ德的妄想を呈していた。Z氏は母親という愛情対象を失ったという気持ちと母親を病気にさせてしまったという罪悪感を感じていた。Z氏に分析が必要なことは明らかであったが、Kohut の事情ですぐに分析を始めることが難しかった。しかし、2回目のコンサルテーションのときには、Z氏の緊張が随分ほぐれ、顔色も良くなった。そして、Kohut が分析を6ヶ月間待ってほしいと頼むと、Z氏はこれを受け入れた。Kohut は、必要なら時々は面接してもよいと伝えたが、Z氏は一度手紙を書いてきただけで、面接を要求することはなかった。Kohut は、Z氏の幸福感の増大を「理想化転移」であろうと考えた。

#### ⑥ 第2分析（自己心理学的オリエンテーション）の第1期

Z氏の第2分析が始まった。Z氏は最初のセッションのときに、前の晩にみた夢を報告した。その夢は、次のようなものであった。

「それは、丘、山、湖がある田舎の風景の中にいる黒い髪の男性のイメージでした。その男性はそこに静かにゆったりと立っていましたが、強く信頼できそうに見えました。彼は都会風の服装をしており、複雑ですがきちんとした着こなしで……指輪をしており、胸のポケットからハンカチがのぞいていて、手には何か……確か一方の手に傘を持ち、もう一方の手に手袋を持っていました。その男性の姿は、大変人工的な感じがし、浮き上がって見えました……対

象に焦点が合い、背景はぼけている写真の中の人のようでした。』

Z氏は、風景からサマーキャンプの時を、髭からは父親を、また傘、手袋、ハンカチ、指輪からは Kohut を連想した。このことから、夢の中の男性は、父親、キャンプ・カウンセラー、分析家が凝縮されたものであると思われた。また、その印象的な外見、誇らしい態度、Z氏がその人物について語るときの尊敬の調子から、理想化転移が生じていることが示唆された。Z氏は、連想のなかで、第1の分析の末期に見た「父親が贈り物の包みを抱えて帰ってくる夢」を思い出した。これは最初の分析とのつながりを示すものであった。Z氏の理想化は短期間しか続かなかった。約2週間後に、この理想化は消失し、今度は鏡転移（融合タイプ）が生じた。つまり、Z氏は、自己中心的で要求的となり、完璧な共感を求めるようになった。Z氏の心理状態に対する Kohut の共感が少しズレていたり、Kohut がZ氏の伝えたいことを少し誤解したりしても、Z氏は怒って反応しやすくなった。最初の分析にもこれとよく似た時期があった。最初の分析では、Kohut はこうしたZ氏の行動を防衛とみなし、対決する姿勢を取った。しかし、今回は、これが幼児期の状況の復元であり、分析的に価値のあるものとみなした。

## (2) 鏡転移について

Z氏の分析過程で、Z氏が Kohut に対して完璧な理解や共感を求める時期があった。どんな患者でも自分が正しく理解されることを求めるものであるが、自己愛人格障害の患者の場合には、この欲求が非常に強烈で、分析家の理解・共感のわずかのずれや失敗が患者に大きな不満を引き起こす。このように自己の様々な側面を確認・承認してほしいという患者の欲求が分析家に向けられてくる現象を鏡転移という。確認・承認されたい側面は、気分、感情、潜在的資質、能力、魅力、すばらしさ、達成したこと、経験・思考の妥当性など、多様な範囲に及ぶ。いわば、分析家はこれらの側面を映し返す「鏡」のような存在として必要とされているのである。そして、分析家が患者の確認されたい内容を確認するような応答をするとき、患者の自己は統合性が増大し、活気や自尊心が高揚する。逆に、分析家がこの応答に失敗し、患者を失望させると、患者の自己は統合性を失い、抑うつ、空虚感、活気や自尊心の低下などが生じる。また、患者が不機嫌となり、怒りを向けてくることもある。つまり、患者の確認・承認されたいという欲求は、分析家を自分の体や心の一部のようにコントロールするような性質を備えている。このように「自己のために用いられるか……自己の一部と経験される対象」を Kohut は自己対象 selfobject と呼ぶ (Kohut, 1971, p. xiv)。

したがって、この転移に対する正しい理解がないと、分析家は患者の態度を強圧的と経験し、それを拒否したくなるものである。事実、古典的精神分析の枠組みでは、このような患者の欲求は、母親から全面的配慮を受けることができた前エディプス期への固着あるいは退行とみなされる。Kohut がZ氏の第1分析で取った姿勢は、このような視点に基づいていたわけである。

Kohut が古典的な視点を修正するに至ったのは、自己が健康に発達し融和性のある自己が成



立するためには、幼少期に自己対象としての親が子どもの自己の様々な要素を確認・承認すること（映し返し mirroring）が重要だという事実気づいたからである。Kohut は、自己を確認する鏡のような存在を求める欲求を人間に本来的なものと考え。とくに、乳幼児の未発達な自己は、自己の統合性を維持するために、親の映し返しを当然の環境として必要とし期待している。具体的に述べると、乳幼児は、自分の気分、感情、潜在的資質、達成したこと、能力、有能性、思考・行動の妥当性などを親から確認してもらうことにより、それが確かなものだ（確かに自分のなかにある、自分が体験している、自分は価値のある存在だ、など）と経験することができる。それらを自己の大切な要素として統合することができるのである。そして、健康な親なら映し返しを求める子どもの欲求を拒否することはないのが普通である。分析的治療関係においてこの欲求が復活するのは、その欲求の一部が幼少期に自己対象（親など）から適切な応答を受けなかったからである。そう考えると、自己対象転移は患者にとっては年齢に不相応なものではない（Kohut, 1977, p. 91）。Kohut は、自己を顕示・表現し確認・承認を求める上記のような傾向を誇大自己 grandiose self と呼んでいる。Kohut によれば、中核自己を構成する野心は誇大自己が姿を変えたものであり、いわば誇大自己の成熟した形態である。誇大自己が自己対象（親など）から適度な確認・承認を受けるとき、このような変容（成熟）が生じる（Kohut, 1971）。

なお、鏡転移は分析が進むにつれて自然に発展してくるとは限らない。幼少期に誇大自己が自己対象から適切な応答を受けないと、それは未成熟なままにとどまり、心の奥に抑圧されてしまう。つまり、自己の確認や承認を求める切迫した強烈な欲求が満たされないまま眠っているのである。転移によってこれが復活してくることは、患者の心的平衡を揺さぶる。なぜなら、誇大自己の復活が患者に強い恥の感情、自意識過剰、現実感を失う不安などを引き起こすからである（Kohut, 1971, pp. 149, 153）。誇大自己の復活を妨げる患者の防衛をまず軽減しなければ、鏡転移が発展してこないことも多い。

### （3）理想化転移について

Z 氏の分析経過のなかに出てくる理想化転移とは、患者が分析家を理想化し、理想化された分析家とつながることによって心的平衡が保たれる現象である。理想化した分析家から感じる偉大さ greatness、力強さ strength、平静さ calmness などと融合 merge（一体化）することによって、自己の統合性が維持されるような転移関係である（Kohut, 1984, p. 194）。Z 氏の場合も、理想化転移が Z 氏に一時的に安心感をもたらし、問題を抱えながらも分析を待つことを可能にした。

なぜ理想化転移が生じると患者の自己の統合性が保たれるのであろうか。それは、理想化された自己対象が患者の自己の機能の弱さを補い、自己の統合性と心的平衡を維持する働きをしているからである。ここでも分析家は患者の自己対象として経験され、必要とされているので



ある。つまり、患者の自己には通常なら備わっているはずの機能が欠損しているということである。この欠損はどうして生まれたのか。子どもの自己が形成される発達早期に目を向けてみると、親と子の間には理想化転移に見られるような融合的関係が当然のように存在している。例えば、乳児は、空腹、不快、痛み、暑さ・寒さといった不快な刺激を自分の力だけで除去することはできない。そこで母親が乳児の状態を共感的に察知して、授乳をしたり、不快や緊張を除去したり、快体験を与えたりしている。母親は、乳児の不快や緊張が限度を越えないように調節する役割を果たしている (Kohut, 1971, p. 46)。もちろん母親の共感や応答は完璧なものではないから、乳児が不快や不安に圧倒されたり、欲求不満に陥ることもあるであろう。しかし、このような母親の共感の不備や失敗が適度な範囲にとどまるなら、子どもはそうした母親の失敗を契機にして母親に代行してもらっている機能を自分自身で果たそうとするようになる。

入眠を例にとって説明しよう。乳幼児は、最初母親に添い寝してもらい、愛撫されたり、子守歌を歌ってもらったりしながら眠りに着く。しかし、母親は、子どもが成長するにつれて次第にこうした関わりの頻度や程度を減らしていく。それと並行して、子どもの方でも、親とのやりとりや子守歌を独り言のように口ずさんだり、親とのやりとりの記憶を活性化させることによって、ひとりで眠りに就けるようになる (White & Weiner, 1986, p. 99; Stern, 1985, p. 173)。このようにして、子どもは自分で不快や緊張を鎮める力、すなわち自己緩和self-soothing (Kohut, 1971, p. 64) の力を獲得していく。自己対象の機能が内在化され自己の統合性を保つ機能に変容していく過程を、Kohut は変容性内在化 transmuting internalization と呼んでいる (1971, pp. 49-50)。そして、内在化された機能のことを(心的)構造(psychological, psychic) structure という (1971, pp. 64-67)。

理想化された自己対象との一体化と変容性内在化は、もっと後の時期にも見られる。例えば、幼児期の男子は、父親を理想化し、父親の男らしさ、強さ、平静さと融合(一体化)するなかで、自分が父親と同じ男であることへの喜びと誇りを体験する。また、父親と同じ特徴や資質が自分にもあると思ったり、自分の潜在的資質や能力を父親から認められたり、父親と一緒に同じ活動や遊びをしたりするなかで、男性らしい特徴、行動基準、目標などの発達が促される。やがて、成長するにつれて、男子は父親への失望をも体験し、理想化から脱却していく。しかし、この失望と不満が適度な範囲にとどまるなら、それは父親との一体化の体験から得られた特徴、基準、目標などの内在化を促進する。自分自身の内的な基準や目標が生まれると、男子はそれを支えとすることによって、自己充足できるようになる。

しかし、上記のような理想化された自己対象との融合体験が乏しかったり、自己対象に対して時期尚早あるいは急激な失望を体験した場合には、変容性内在化が妨げられ、本来なら育つ自己の機能(構造)が育たないままにとどまる。その結果、子どもは長じてからも自分の外に理想化された自己対象を求め続けることになる。つまり、常にそのような他者から不安や感情

を緩和してもらったり、自分を方向づけ導いてもらったりしないと、安心が得られなくなる。仮に理想化された対象を求める気持ちが抑圧されている場合でも、無意識にはそのような対象を求めているのである。

理想化転移において、患者が必ず分析家への理想化を言葉で表現するとは限らない。患者の症状変化、言動、夢などに現れたサインを通して理想化転移の存在を推測するしかない場合もある。また、鏡転移の場合と同様に、理想化転移は何もしないでも自然に発展してくると期待してはならない。理想化転移の発展を妨げている患者の防衛を分析しなければならないことも多い。患者が理想化転移を恐れるのは、次のような理由による。まず、理想化された対象との融合は、それによって自己の個性が消失してしまう恐れを引き起こす（1971, pp. 87-88）。また、患者は過去に理想化された対象と一体化したい欲求を拒否された外傷体験を持っているので、再びこれが分析家から拒否され、決定的な打撃を受けることを恐れるのである。

#### （4）症例呈示：Z氏の症例（その2）

##### ① 第2分析の第1期の続き

伝統的な対象関係の用語で説明するなら、Z氏が示した姿勢や態度は、母親を独占でき自己愛的満足に浸れた頃の再現である。そして、母親によって溺愛され過剰な満足を味わったために、このような固着が生じたということになる。しかし、この説明では、次の2つの問題が解明できない。ひとつは、彼の尊大さと並存する慢性的絶望感であり、もうひとつは、注目されて当然だという彼の強い主張とは矛盾する性的マゾヒズムである。

Kohutの理論的視点の変化は、今まで見えなかった意味に気づくことを可能にした。Z氏は最初母親の病理性を認識しておらず、母親を理想化していた。しかし、実は、Z氏の母親には周囲の者を奴隷のように従わせ、独立性を奪ってしまうような面があった。母親は病的なほど嫉妬深かった。これは、Z氏も父親も、十分認識するまでには至らないが、感じていたことであった。Z氏は、母親が何かしてくれるのは彼が母親の意志に服従するからであり、母親との関係においては彼の自律的な欲求が禁止され、母親以外との関係が排除されていることに気づき始めた。また、父親が浮気をしたのは、母親から逃れたかったからだということに気づいた。そして、父親の家出のとき、意識の底では、父親に見捨てられたと感じていたことも知った。このことに関連した記憶の想起、また母親との関係の本質についての洞察の深まりとともに、Z氏は激しい不安を経験した。この不安は深刻な抵抗を生み、彼は分析的探求をしりごみし、「自分の記憶は正しいかどうか分からない」などと言い始めた。これは、「原始的自己対象としての母親を喪失することに関連した恐れ」であった。この喪失は、Z氏に、それしかない自己が解体し失われてしまうのではないかというおびえ（統合崩壊不安 disintegration anxiety）を抱かせていたのであり、そのため拒絶の防衛が働いていたのである。

Z氏は、今までは普通だと思っていた母親の行動のなかに奇妙な点があったことを認識し始

めた。例えば、母親は、Z氏の将来について話すとき、Z氏が母親のもとを離れないということとを当然の前提としていた。母親は、Z氏の便を詳しく調べたり(6歳まで)、Z氏の顔の小さな吹き出物にこだわり、それを取り除いたりする行動があった(青年期まで)。Z氏は8歳の時に個室を与えられたが、プライバシーはなく、ドアはいつもあけておくように言われ、母親が突然部屋に入ってくることもあった。Z氏の母親はボーダーライン的ケースであり、Z氏をコントロールすることによって精神病的な問題が露呈するのを免れていたのだと考えられる。

では、この話題がどうして最初の分析では問題にならなかったのか。実際には現れてはいたのだが、2人の関心を引かなかったのである。Kohutは古典的な視点に確信を抱いており、Z氏は幼少期に母親に順応したのと全く同様に Kohut の確信に同調していただけだったのである。

この経過から、幼児期の自慰と原光景行動についても新しい見方が可能になった。これらは、最初の分析では「前性器的満足を通しての幼児的快感への固着ないしは退行」とみなされていた。しかし、母親に癒着し同調していたZ氏には、独立し成長することに伴う喜び、すなわち「自己の境界をはっきりさせ自立していくことに伴う喜び」はなかった。幼児期のZ氏には、抑うつ的な暗い気分が漂っていたのであり、自慰にも原光景への没頭にも本当の喜びはなかったのである。Z氏の自慰は、もっとも感じやすい身体領域への自己刺激を通して、自分に活力を与え、自分の存在を確認しようとする行為だったのである。原光景体験も、Z氏にとっては無神経に与えられた過剰刺激的体験であり、母親の行動にのみこまれてしまうことであった。自慰の際のマゾヒスティックな性的服従の空想は、母親の要求に服従しているZ氏の状況を表現していたのである。

## 5. 誇大性と自己の分裂

### (1) 誇大性と垂直・水平分裂

Z氏にも見られたように、自己愛人格障害の患者には、誇大性、すなわち尊大・優越的な態度や「自分は特別だ」という意識がみられることがある。他者との交わりを避けて孤立するか周囲から特別の配慮を求めるといった傾向を通してこの誇大性の存在が推測できる場合もある。また、崇高な目標に憧れるとか救済者的役割を取りたいと願うことが誇大的自己意識に基づいている場合もある。その一方で、自尊心の低さ、空虚感、心氣的傾向といった傾向も存在しているから、これは自己愛人格障害の患者における一つの矛盾である。Kohutはこれを垂直分裂 vertical split と呼ぶ(Kohut, 1971)。

Kohutによれば、この誇大性は、決して患者の中核自己に根ざしたものではない。すなわち、患者の中核的な野心や理想を実現しようとする試みがもたらす自負や自尊心に基づくものではないのである。むしろこの誇大性は、患者の病理の主要な発生源である自己対象との関係において育った誇大性である。その自己対象が承認・賞賛した自己の部分患者も自分本来のもの

だと信じていたり、その自己対象の期待や願望をそのまま取り入れて誇大的な自己像を抱いていたりするのである。その一方、この誇大性とは裏腹に、患者の中心的な欲求は満たされないまま抑圧されている。図の②によって示されるこのような分裂を、Kohut は水平分裂 horizontal split と呼ぶ (Kohut, 1971)。水平分裂は、現象的には、欲求を満たしてくれる可能性のある対象から距離を取り、ひきこもる態度として出現する。このように患者は一方で誇大性を示しながらも、同時に重要な欲求の飢餓に苦しんでいる。そして、患者自身は上記のような分裂にも自分の誇大性にも気づいていないことが多い。病理的自己対象 (Z 氏の場合には母親) との関係の問題性に気づかず、その自己対象を理想化しているということもできる。実は、上に述べたような誇大性が、抑圧された欲求不満の存在を否認する役割を果たしているのである (Kohut, 1971, p. 198)。Z 氏の場合には、母親との融合的癒着から離れて自律的な独自の自己を主張したいという欲求や、父親と一体化することによって男性性の核を得たいという欲求が母親に認められなかった。

こうした二重の分裂が生じるのは、次のような理由による (Kohut, 1971, pp. 197-198)。まず、応答してもらえない欲求は通常よりも激しさを増す。激化した欲求は心的平衡を崩すので、自己から排除される。そして、その欲求が再び拒否されることへの恐れから、排除された欲求が復活してこないように防衛の壁が築かれるのである。

## (2) 垂直分裂の解消

自己愛人格障害の分析の第一ステップは、図の①で示された垂直分裂を解消させることである。すなわち、患者の誇大性が病理的自己対象の願望や期待を代弁する借り物の自己であることに気づかせ、誇大性ととも存在する空虚で剥奪された感じが本来の自己の一部なのである

(防衛的ではない) 理想化を受けた母親との融合が持続していることに基づく露骨な誇大性と「優越的」孤立。  患者が母親の付属物であり続けることを条件に、母親は患者を父親よりも優越した者として扱った。	①	垂      分  裂	低い自己評価、抑うつ、マゾヒズム、 母親に対する (防衛的) 理想化  ②                      ②                      ②  抑   圧   の   バ   リ   ア  父親に対する (防衛的でない) 理想化；母親への怒り； 自己主張的な男性性と顕示性
	①		
	①		

図 1 Z 氏の自己の分裂と自己心理学的精神分析の段階 (Kohut, 1979a)

自己心理学の概念に基づく分析治療は、2つの段階を経て行われる。最初の段階は、①①①で示された線に沿って行われる：Z氏は母親との融合を失い、それによって現在意識している自己を失う恐れに直面する。第2の段階は、②②②で示された線に沿って行われる：Z氏は、彼の孤立した自己が抱く怒り、主張性、性、顕示性に気づくにつれ、外傷的な過剰刺激と統合崩壊の恐れに直面する。

ことを実感させることである。それは、母親に対する融合的関係と防衛的理想化に気づかせ、それからの脱却を可能にすることでもある。しかし、この過程は、いくら病理的とはいえそれまでもっとも重要な自己対象であった人との心理的別れであるから、患者は自己が失われてしまうような不安を体験する。この不安に耐えられるよう患者を支えることも重要である。

### (3) 症例提示：Z 氏の症例（その 3）

#### ① 第 2 分析の第 2 期

母親との癒着からの解放が進むにつれて、Z 氏の抑うつは軽減し、Z 氏は自分の要求を強烈に体験でき、活発に表現するようになった。活気、気分の高揚、希望を体験し始めた。同時に、彼の話は父親についての思いに移っていった。Z 氏は、Kohut の夫婦関係などを知りたがるという転移を示し始めた。Kohut は、この裏に、妻に服従して息子の支えにならない父親とは違う強い父親を求める気持ちが隠れていることに気づいた。それを解釈すると、Z 氏の抑うつが劇的に軽減し、Z 氏は Kohut のことを知りたいという要求をしなくなった。また、彼の要求に全部は応じなかった Kohut の姿勢を「強さ」の印と受け取った。Kohut は、キャンプ・カウンセラーについても、Z 氏自身の考えに同意し、カウンセラーは強くて父親のような男性、おそらく Z 氏にはいなかった尊敬できる兄のような存在だったのだらうと考えた。

この頃から分析は大きな転回点を迎えた。Z 氏は、父親の人格の肯定的特徴について語り始めた。しかし、ここでも Z 氏は深刻な不安に見舞われた。Z 氏は、自分が解体してしまうように感じ、強い心氣的こだわりを示した。夢には、あれ果てた荒野、焼き尽くされた都市、死体の山などが現れた。Z 氏は今や自己対象としての母親と結びついた自己を放棄しつつあり、今までは認識していなかった父親との関係を中心にして独立した中核自己を復活させる準備をしていた。この時期に一度だけ母親の夢が報告された。それは「母親が彼に背を向ける夢」であり、Z 氏は今までで最大の不安を感じた。この夢は、独立へと向かおうとする息子に対する母親の冷たいひきこもりを示すものと理解された。

父親についての記憶のなかで、Z 氏がとくに詳しく述べたのは、9 歳の時の父親と 2 人だけのスキー旅行であった。この時のエピソードから、弱くて存在感がないように見えた父親が、実は統合のとれた人格と資質を持っていたことが分かってきた。父親はスキーがうまく、ウェ이터やメイドの扱いも心得ていて、父親の回りには人の輪ができた。電話での会話や新聞を読んでいる時のコメントから、父親の仕事の世界での決断力、見識、技能を垣間みることができた。ここで重要なのは、父親が母親とは独立した人生を歩んでいたこと、父親の人格が母親の人格ほど歪んではいないことに気づいたことである。Kohut は解釈の焦点を、これらの経験が患者にとって持つ意味に集中させ、「尊敬でき誇りに思うような理想化された男性がほしい」という欲求に対する理解を表現した。

父親についての記憶は、Z 氏が当時 9 歳であったにも拘らず、最も深く抑圧されていた。し

かし、それらの底には、病理的なエディプス葛藤は隠れていなかった。父親についての誇らしい気持ちに伴っていた。「男性的力のイメージを発見した」、そして「それと一体化して自分の自律的な男性的自己を強化することができる」という歓喜があった。

## ② 第2分析の終結期

Z氏は、再び、最初の分析の終わりに見た「父親が贈り物の包みをもって帰ってくる夢」を思い出した。新しい理解とZ氏の連想から、この夢は、去勢不安を伴った父親への敵意を表すものではなく、あまりに長く父親なしに生きてきた少年の心理状態を示すものと思われた。すなわち、少年は父親を理想化すると同時に父親の欠点をも発見し父親に失望することを通して、理想化された父親が果たしてくれていた機能を内在化し、男性性を備えた自立的自己を形成していくのであるが、Z氏はそうした機会を奪われていた。父親の帰還は、突然Z氏の一番重要な欲求が満たされる可能性をもたらした。しかし、父親への広範な理想化と同一化が一度に生じることは、Z氏の自己が父親の自己に置き換えられてしまう不安（自己喪失の不安）を引き起こす。Z氏の夢は、Z氏が父親から心理的贈り物をあまりに突然に与えられたため、それに対処することができず、せっかくの贈り物を拒まざるをえないことを表している(Kohut, 1980, pp. 518-523)。この夢は、幼少期に父親が帰ってきたときのZ氏の状況であると同時に、現在Kohutとの転移関係においてZ氏が直面している状況をも表現している。

治療の終結が決まった後も、Z氏の症状の悪化や深刻な不安は出現しなかった。短期間であったが、Z氏はKohutを失うことについての悲しみを表現した。また、もう父親と親しい関係をもつことはできず、自分のしたことを父親に誇りに思ってもらうこともできないのは残念だと述べた。そして、何回かのセッションでは、最初の分析が失敗したので分析が本来よりも長引いてしまったと言って怒りを表現した。しかし、終結前の最後の数週間は、親の欠点に対して今までより共感的で受容的な態度を示すようになった。母親を理想化はしないが、母親の好ましい特徴や母親から得たものについても認めた。事実、彼のもっとも大事な技能・才能にも野心・理想にも、父親の人格の影響は見られなかった。しかし、分析によって、父親の男性性や独立性とのつながりが再形成され、彼の野心、理想、基本的技能・才能の「情緒的核」が決定的に変容したのである。そして、彼は自分の資質を本当に自分自身のものとして経験し、マゾヒスティックな同調ではなく、独立した自己の活動としての人生目標に向かって進み始めた。

## (4) 水平分裂の解消

このように、Z氏は、自己対象である母親との融合的癒着関係から離れるのと並行して、「尊敬でき誇りに思うような理想化された男性がほしい」という欲求を復活させた。この欲求は実は幼少期から存在していたのであるが、ずっと水平分裂によって抑圧されていたのである。第2分析の転移の推移を振り返ってみると、まず①短い理想化転移が生じ、それが②鏡転移に置き換わり、最後に③理想化された父親への希求が生じた。Kohutは、これらの順序が幼児期の体

験の経緯を反復するものだと考えている（1971, p. 141）。つまり、患者は幼児期に父親を理想化し、それによって母親との融合的関係から脱却し、母親に起因する自己の欠損を修復しようと試みたのだが、父親の家出も災いして、この試みに失敗したと考えられる。したがってZ氏の分析の最後に登場する父親への理想化は、最初に失敗した試みの新たな企てであり、これに成功することは患者の停滞していた発達の再開を意味するわけである。自己愛人格障害の分析治療の第2ステップは、水平分裂を解消し、患者の中核自己の修復に寄与する欲求を復活させることである。

ところで、上記のようにして復活した父親希求には、古典的理論で言うエディプスの敵意や競争心は伴われていなかった。このような資料を根拠にして、Kohutのエディプス・コンプレクスに対する新しい解釈が導き出されてくるのであるが、この問題については上地（1993b, 1994b）を参照してほしい。

理想化された父親への希求の復活とともに、Z氏は理想化された父親像をKohutにだぶらせるとような転移を示している。Kohutによれば、このような理想化転移において、患者は理想化された父親イメージを分析家に投影し、分析家がそれに一致していると感じたり、そうではないと感じて失望したりしながら、理想化された父親イメージを理想化された基準や目標に変容させ内在化する。Z氏の場合は、「母親とは独立した人生をもつ人格的に健康で有能な人」という父親イメージが内的な基準に変容し、それが核となってZ氏が母親から獲得したものも統合され、自立的な自己が誕生したということであろう。Z氏の自己回復がどうしてこのような形で達成されるのかについては、上地（1994a）を参照してほしい。

## 6. ま と め

Kohutの「Z氏の症例」を紹介し、その分析過程に沿って、自己愛人格障害患者の自己の欠損、そのために生じる自己対象転移、垂直分裂と水平分裂、自己愛人格障害の精神分析的治療について、Kohutの概念を整理した。

## 引 用 文 献

- 上地雄一郎：Self Psychology (Kohut 理論) の基礎概念についての臨床的検討（Ⅰ）：自己愛人格障害と自己対象転移。総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集，第9巻，89—105。  
上地雄一郎：Self Psychology (Kohut 理論) の基礎概念についての臨床的検討（Ⅱ）：Self Psychology からみた欲動理論とエディプス・コンプレクス。総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集，第9巻，107—117。  
上地雄一郎：Self Psychology (Kohut 理論) の基礎概念についての臨床的検討（Ⅲ）：中核自己と補償的構造。総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集，第10巻，印刷中。



- 上地雄一郎：Self Psychology (Kohut 理論) の基礎概念についての臨床的検討 (Ⅳ)：エディプス期における自己発達と自己対象。総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集，第10巻，印刷中。
- Kohut, H.: *The Analysis of the Self*. International Universities Press, 1971.
- Kohut, H.: *The Restoration of the Self*. International Universities Press, 1977.
- Kohut, H.: *How Does Analysis Cure ?*. The University of Chicago Press, 1984.
- Kohut, H. & Wolf, E. S.: The Disorders of the Self and Their Treatment: An Outline (1978). In Ornstein, P. H. (ed): *The Search for the Self*, Vol. 3, 359—385, 1990.
- Kohut, H.: Four Basic Concepts in Self Psychology (1979b). In Ornstein, P. H. (ed): *The Search for the Self*, Vol. 4, 447—470, 1991.
- Kohut, H.: The Two Analyses of Mr. Z. (1979a). *International Journal of Psycho-Analysis*, **60**: 3—27. In Ornstein, P. H. (ed): *The Search for the Self*, Vol. 4, 395—446, 1991.
- Rowe, C. E. & Mac Isaac, D. S.: *Empathic Attunement: The Technique of Psychoanalytic Self Psychology*. Jason Aronson, Inc., 1989.
- Stern, D. N. : *The Interpersonal World of the Infant*. Basic Books, Inc. , 1985.
- 小此木啓吾・丸田俊彦 (監訳)：乳児の対人世界 (理論編，臨床編)，岩崎学術出版社，1989，1992。
- White, M. T. & Weiner, B. W.: *The Theory and Practice of Self Psychology*. Brunner/Mazel, 1986.
- Wolf, E. S. : *Treating the Self: Elements of Clinical Self Psychology*. Guilford Press, 1988.

(平成 5 年11月30日受理)